（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	八尾市立障害者総合福祉センター（児童発達支援）			
○保護者評価実施期間	2025年2月10日		～	2025年3月10日
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	11	（回答者数）	7
○従業者評価実施期間	2025年2月10日		～	2025年3月10日
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	5	（回答者数）	5
○事業者向け自己評価表作成日	2025年3月23日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	重心児や医療ケア児の受け入れを優先的に行っている。保育士・HPS（Hospital Play Specialist）・看護師・セラピスト等が在籍し、子どものことを十分に理解し、子どもの特性に応じた専門性のある支援を行っている。子ども達が安心・安全に過ごせる環境づくりはもちろん、個々の発達課題を見極めて細やかに丁寧に支援を行うことができている。	子ども達の遊びや生活を軸に保育の五領域に基づき個別支援計画を立てている。職員の共通認識の下、個々の課題や支援方法について都度、更新を行いながら支援にあたっている。日々の活動に関しては、その日の利用児の特性や集団の特性に合わせてより活動がしやすい環境（ヒト・モノ・コト）を提供できるようにしている。また、医療ケアのある子どもに対してはその行為が肯定的なものとして受け止められるよう、処置の際にはHPSが介入し、遊びながら処理やケアを行うようにしている。	さらなる支援の質の向上を目指し、一人ひとりの職員が自己研鑽を行うこと、また、新たな資格取得に挑戦している。支援の内容によっては長期的な記録、評価を行い、分析し学会や研究会等での発表を行継続する。
2	活動プログラムが固定化されないように工夫を行っている。それぞれの発達段階において必要な支援と年齢相応に経験して欲しいことなどを組み合わせて子どもがどうすれば活動しやすいか、楽しめるか、それぞれの専門性を活かしながら様々な視点から保育を組み立てている。	スポーツホールや戸外、デジタルリハビリやスヌーズレン室などを利用し、子ども達の活動に合わせた空間での取り組みを行っている。内容に関しては、通常の保育以外にも季節の行事や時事（オリンピックなど）、地元に基づいた遊び、外国籍の利用児も在籍するため、異文化に触れるプログラムを実施している。	子どもの好きなことややってみたいことを家庭や他の関係機関と情報共有をしながら遊びのヒントを得る。施設の特徴でもある世代間交流も積極的に行い、様々な人と子ども達が触れ合う機会を作っていく。今ある設備も常にアップデートをして子ども達の興味・関心を引き出せるように努める。また、「できない」をどうすれば「できる」に変換できるかを常に考え、子ども達のみならず施設全体での取り組みや療養環境改善に努める。
3	子どものことを十分に理解し、子どもと保護者のニーズや課題を客観的に分析し支援に活かしている。そのため、日ごろから子どもの状況を保護者と伝え合い、連絡や情報共有を密に行うことで子どもの発達の状況や課題についても共通理解を持てるようにしている。	基本的には連絡、相談、助言や支援などは直接、保護者の方とお話をさせていただくことを基本としている。子ども達の日常の様子は連絡帳でのやりとりが中心とはなるが、子どもの姿や情景が浮かぶように連絡帳に丁寧に記入するように努めている。また、遊びや生活の様子が見えるようにインスタグラムへの投稿を行い、子どもの日常を見てもらえるようにしている。また、半年ごとに個別の写真アルバムもお渡ししている。保護者の方に安心して利用してもらえるよう、日ごろから保護者の方とのコミュニケーションを大切にしている。	インスタグラムは多くの保護者が見てくださっているため、センター全体での取り組み等も積極的に発信し、児童発達支援の利用以降のイメージなども持てるように情報を伝えていく。また、利用児だけでなく、ご家族やきょうだいについての心配事や育児についての相談にも乗り、課題について一緒に解決できるように努めている。きょうだい支援についても今後はきょうだい参加型のイベントを開催するなど計画を行っている。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保育所や認定こども園、幼稚園等との交流や、その他地域で他の子どもと活動する機会が少ない。	交流の機会を設けたいとは思いながらも、新奇場面に対応することが難しい子どもや当日の子どもの体調変化等により、計画をして実施することができていない。	まずは、開かれた施設を目指し、地域の子ども達が施設に気軽に出入りできるように「おさんぽ絵本」を開始したが、まだ広く周知されていないため、SNS等も利用して宣伝をしていく。近隣地域の年間イベントをリサーチし、気軽に参加できるものから参加し、地域の子ども達と触れ合える機会を得る。
2	父母の会の活動を支援することや、保護者会等を開催する等により、保護者同士で交流する機会を設ける、また、きょうだい同士で交流する機会を設ける等の支援を現在、積極的に行えていない。	デイケアを利用する理由として、母の就労やレスパイト、きょうだい児の養育等があげられる中で時間をとって保護者会を開催するかどうか思案中である。きょうだい児支援については、幼児から中学・高校生までと幅が広く、一同に会してというよりも、個別での支援に留まっている。	保護者の可能な時間帯に保育参観を設けるなど、保護者同士が知り合える機会を作っていく。夏休みや長期休みなどきょうだい児が参加できる時期にデジリハやスヌーズレン室の体験会などきょうだい同士が関わりをもてるイベントを開催する。

3	事故防止マニュアル、緊急時対応マニュアル、防犯マニュアル、感染症対応マニュアル等を策定し、職員に周知しているが、家族等への周知が十分ではない。	研修や訓練の機会を設け、また、マニュアルの策定もしているが、保護者に周知・説明する機会を設けてはいない。また、訓練の実施についても見える化ができていない。	各マニュアルをホームページに掲載し、いつでも確認できるようにしておく。訓練での子ども達の様子、防災教育の取り組み、課題、対応策などをその都度、お知らせやSNSで発信し、見える化できるようにする。防災の日に、家族イベントを催し、防災クッキングや非常災害時の対応について考える機会を作る。